

【研究ノート】

少数民族言語で語る場の創出 —サハリン「原語」学会の試み—

津 曲 敏 郎

1. はじめに

現在、多くの少数民族言語が公的に話される場を失っている。各種学会等で語られる対象となることはあっても、伝達手段として多少とも公的な場で使われる機会はまれであろう。そればかりか、地域社会や家庭においてさえ使用されることが少なくなり、辛うじて老人の記憶のなかにとどまっているというケースも少なくない。次世代への継承の途切れた言語は、母語話者がいなくなるという意味では、早晚消滅をまぬがれない。しかしながら、そのような状況にあっても、非母語話者の世代が自分の民族の言語に一定の理解と関心を持ち、価値を認めて学ぶ意欲を保ち続ける限り、当該民族にとって「消滅」の宣告は受け入れがたいものであろう。津曲 (2010: 9) ではそのような意味での「保持」をめざすことこそ、危機に瀕した言語が「生き残る」ための現実的な道であることを述べた。

非母語話者が不完全な知識と運用力で話したり書いたりすることは、もちろんその言語本来の姿を反映しているとは限らないが、言語を軸とした民族文化の活性化には有意義である。上の世代は、先祖伝来の言語に込められた知恵や伝統を、たとえ断片的であっても次世代に受け継いでほしいと願うのが自然だし、若い世代のなかにもそのような意識を持つ人は少なくない。そのためには当事者だけでなく研究者や機関、支援組織等による意識的な取り組み、とりわけ「語る場の設定」が有効である。

そうした点で、画期的なシンポジウムがサハリンで開催され、参加する機会を得た。本稿ではその概要を報告して意義を再確認するとともに、筆者のウイルトタ語による発表テキストを再録する。

2. 極東先住少数民族言語による第 1 回国際シンポジウム

標記シンポジウム (Первый Международный симпозиум на языках коренных малочисленных народов Дальнего Востока; The 1st International Symposium in the Languages of Russia's Far-East Indigenous Minorities) が 2014 年 10 月 2, 3 日の両日にわたって、ユジノサハリンスク市にあるサハリン州郷土博物館で開催された。「国際」シンポジウムを銘打っていたが、外国からの参加は日本から 3 名 (筆者のほか白石英才氏、丹菊逸治氏) とポーランドから調査でサハリンを訪れていたアルフレッド・マイエヴィチ Alfred F. Majewicz 氏のみであり、それだけに日本からの参加は歓迎された。ロシア国内からはアレクサンドル・ペヴノフ Aleksandr M. Pevnov 氏がサンクト・ペテルブルグから参加した以外は、いずれも地元サハリンおよびハバロフスク州ならびにウラジオストクなど極東からの参加者が大勢を占めた。発表は第 1 セッション「ツングース満洲諸語」、第 2 セッション「ニヴフ語」からなり、プログラムの記載では前者 11 件、後者は 2 日間に渡り 18 件が、ほぼプログラムに沿って行われた。このほか 1 日目の冒頭では歓迎の辞を兼ねた数件のスピーチ、2 日目第 2 セッション終了後にはディスカッションおよび総括的なスピーチが何件かあった。

発表の募集要項に「ニヴフ語、ナーナイ語、ウイルトタ語、エウエンキー語およびそのロ

シア語訳」でタイトルおよび発表原稿を提出すべきことが明記されており、本シンポジウムの意気込みが示されていた。しかし蓋を開けてみると、発表の全体または一部をこれらの少数民族言語で行ったものは半数以下にとどまり、主催者側から配布されたハンドアウトもロシア語のもののみだった。民族間での相互理解のためにはやはりロシア語によらざるを得ないという現実的な要請と、たとえ同民族であっても世代間では民族語が通じない現状を反映した、ある意味では自然な結果と言うべきかもしれない。そのことは主催者側も織り込み済みだったことだろう。そのうえで、あえて民族言語での発表を一応の「規定」（もしくは目標）として掲げたところに、今回のシンポジウムの象徴的な狙いを読み取ることができる。民族言語で「何を語るか」よりむしろ、「何かを語る」ことに重きが置かれたと言えよう。



写真：シンポジウムで発表する筆者（サハリン州郷土博物館 HP から）

3. 少数民族／研究者／企業の連携

こうした場の創出という点で今回のシンポジウムは意欲的な試みであり、地元サハリンのウイльта語やニヴフ語、大陸からの参加者によるナーナイ語、さらに少数ではあったがエウエンキー語やアイヌ語（丹菊氏）などが、ロシア語と肩を並べて会場に飛び交ったことは、画期的なできごとであったに違いない。集まった少数民族の人々の顔が生き生きとしていたのが印象的であった。とりわけ、民族の未来を担う若い研究者が（もはや自分たちにとって母語ではない）自民族の言語で発表したのは、会場に大きな感銘を与えた（ウイльтаのオリガ・ソロヴィヨワ Ol'ga F. Solov'eva 氏、ニヴフのエレーナ・ニトクク Elena S. Nitkuk 氏ほか）。

一方で、当該民族ではない研究者が研究対象である言語で発表したのも、当該民族にとっては連帯の表明もしくは励ましとして好意的に受けとめられた（津曲、丹菊氏以外に白石氏はニヴフ語、ペヴノフ氏は一部をエウエンキー語で発表）。部外者を排斥して閉じこもるよりは、むしろ取り込んで手を携えることが少数民族言語の保持・活性化に有効であることは言を待たない。さらに、博物館がそうした内外の研究者と少数民族のあいだを取り持つ場となっていることも重要である。

ちなみに今回のシンポジウムにはスポンサーとして、サハリンで事業を展開するエクソン石油ガス社 (Exxon Neftegas Limited) と、サハリン・エナジー社 (Sakhalin Energy Investment

Company LTD) が資金提供した。石油開発によって少数民族の生活の場が脅かされてきた事実の一方で、こうした地元企業が専門の部署さえ設けて、少数民族言語文化の保護に継続的に取り組む姿勢は評価すべきであろう。

少数民族言語の保持活動にとっては、当該民族の主体的な意識、研究者の積極的な参画、そして資金提供を含む支援組織の三者の連携が不可欠であることを、かねてから筆者は述べてきた (Tsumagari 2004)。その意味でも今回のシンポジウムは三者連携の好例であったと言えよう。

4. ウイルタ語発表テキスト

以下に、当シンポジウムにおける筆者のウイルタ語による発表を対訳テキストのかたちで再録する。もとより、民族外の非母語話者による原語テキストに言語資料としての意味をもたせるつもりはないが、あえて公表するのは、少数民族言語が母語話者を失いつつあるなかで、非母語話者による実践が今後の保持活動では主体とならざるを得ないと考えるからである。そうした、非母語話者による実践例という意味を保つため、あえて母語話者の校閲は経ていない (ただし山田祥子氏に発表の草稿を見ていただいたことに感謝する)。ちなみに、筆者の発表を聞いたウイルタの一人、エレナ・ビビコワ Elena A. Bibikova 氏は「すべて理解できた」と言ってくれたが、多分に社交辞令を含むであろうことは言うまでもない。もちろんウイルタ語として明らかな誤りや不自然な表現は正すべきものと考えている。

以下のウイルタ語作文にあたっては、池上 (1997)、澗瀉 (1981) 等の辞書を参照した。シンポジウムのハンドアウト用にはロシア字表記ウイルタ語とロシア語訳を提出したが、ここでは Tsumagari (2009) で示したローマ字表記に日本語対訳を併記する。池上 (1997) が č [ʧ], j [dʒ], j, ə, e, e と表記するところを、それぞれ c, j, y, e, ö, ε で表わしている。ウイルタ語に該当する単語がないと思われる場合はロシア語によったが、それをイタリックで区別した。[] 内は直前の表現の逐語訳、() は原文にない補足または参考文献である。

内容としては、以下の標題のとおり、ウイルタの長編物語ニグマーのテキスト刊行 (山田編訳 2014) の経緯と意義について報告したものである。

uilta eposeni niqmaa

ウイルタの長編物語ニグマー

sorojæ! bii uilta kesejini keenjiwi.

こんにちは。私はウイルタ語で話します。

esilekke erejeci *simpojium* towwuri mastaa ulinga.

このたび、このようなシンポジウムが行われることは素晴らしいことです。

nuuci oyuuka narisal kesejici keemburi manga kusumbe tariltai böörini.

少数民族 [小さい少ない人たち] の言語で話すことは大きな力を彼らに与えます。

bii agdapsee unjiwi *muzey* narisaltaini.

私はありがとうございます、(今回のシンポジウムを企画した) 博物館の人たちに。

bii uiltadairiwi weegeddee, xaiddaa keebujji pergexembi.

私はウイльта語を話すのはへたですが、何とか話してみようと考えました。

esigdee bii xooni uilta kesseeni tacixambi keenjiwi.

はじめに、私がどのようにウイльта語を学んだか話します。

jiindooŋoci anani balana, bii *studente* biŋsesseewi, Jiro Ikegami sensei mittei uilta kesseeni allaucini.

40年ほど前、私が学生だったときに、池上二良先生が私にウイльта語を教えました。

bii balana manju kesseeni tacixambi.

私は以前に満洲語を学んでいました。

bii möröcixembi, uilta keseni goci maŋga, manju kesejini.

私は思いました、ウイльта語はずっとむずかしいと、満洲語より。

manju kesenilekke kese bejeteini *okancanie* bai dakseeni.

満洲語なら語幹 [言葉の本体] に語尾がただくっつきます。

naprimer, «bitxe-be» ‘*knigu*’, uilta kesejini «bicixxee»:

たとえば (満洲語の) bitxe-be 「本を」は、ウイльта語では bicixxee (<bicixe+be) です。

kese bejje *okancaniekkee* pooyipcini, kaltalluri maŋga.

語幹と語尾とが融合して、分けることが困難です。

Ikegami sensei ereŋaci maŋga uilta keseni dorrooni ajaji tacigacci, daayi *grammatika* bicixxeeni anducini.

池上先生はこのようなむずかしいウイльта語の文法をよく調べて、大部な文法書を作りました。

bii yee *grammatikawa* tauciiwi.

私はこの文法を読みました。

caŋasseŋ uilta suun eekteneŋ Napka (sisa gelbuni Satoo Ciyo) Xokkaidoodu biccini.

そのころウイльтаの南部 (方言) の女性ナプカ (日本名佐藤チヨ) さんが北海道にいました。

bii Napkatai gēdara gēdara ŋenemi, uilta kesseeni oi oi tacixambi.

私はナプカさんのところへときどき通って、ウイльта語を少しずつ教わりました。

gēda miŋga xuyu taŋgu jakpundoo tunda anani Napka buccini.

1985年にナプカさんは亡くなりました。

nimmaa Xokkaidoodu ojuuka uilta kesele nari bicci.

まだ北海道には少数のウイльта語のわかる人がいました。

bii esigdee tari narildula uilta kesseeni tacixambi.

私は今度はその人たちからウイльта語を学びました。

Ikegami sensei nurixa *grammatika* mastaa tojdo, no joboccuuli.

池上先生の書いた文法は大変精緻なだけに難解です。

bii *primerewe* pooyigacci xurumi *grammatikawa* anduciiwi.

私は例文を補充して短い文法を書きました (Tsumagari 1985, 改訂版 Tsumagari 2009)。

xujundoo anani xamarakkeeni, goi naanneeni Saxalintai sindagaccēeri, ojuuka narisal kesseeni *kuliturawani* taciluxaci.

90年代以後、外国人がサハリンに来て、少数民族の言語や文化を調査し始めました。

Ikegami senseidde Saxalintai tenee sindagacci, uilta sagji ekkeljini uileluxeni.

池上先生もサハリンを真っ先に訪れて、ウイлтаの老婦人たちと仕事を始めました。

bii caņassee Kitaitai Amurtai ŋenexembi, cadu goi goi tunguse kesseeni tacibujji.

私はそのころ中国やアムール地域へ行きました、いろいろなツングース諸語を調べに。

Saxalintai esimeu sindaxambi döö miŋga geeda ananidu.

サハリンへは初めて来ました、2001年に。

caa ananidu Ikegami sensei jakpundoo geeda anani biccindee, xamaruu Saxalintai ŋenexeni.

この年、池上先生は81歳でしたが、最後にサハリンを訪れました。

geeda miŋga xuyu taŋgu xuyundoo nuŋu anani xamarakkeeni, bii anani anani ujege narijini uilebujji Primorskij kraitai ŋenexembi.

1996年以来、私は毎年ウデへの人と仕事をしに沿海地方に通うようになりました。

Saxalintai oi oi sindaxambi.

サハリンへはときどき来ました。

mini studentkaŋubi Yosiko Yamada döö miŋga nuŋu anani xamarakkeeni taciluxani uilta kesseeni.

私の学生山田祥子さんが2006年以来学び始めました、ウイлта語を。

tari eekte geeda anannee Saxalindu uilta narildooni baljixani.

彼女は1年間サハリンでウイлтаの人たちと暮らしました。

ajaji uilta kesseeni utullini.

よくウイлта語ができます。

bii agjeewi, Yosikonoci prige mörölu nari uilta uilekkööni Ikegami senseiduu alixani.

私はうれしく思います、山田さんのような若い有能な人がウイлтаの調査を池上先生から引き継いだのです。

yee martadu ereŋeci ilaa dala uilekkööni xupalagacci, geeda bicixxee anducipu.

この3月にこのような3世代の仕事を合わせて、1冊の本を私たちは作りました。

eri uilta niŋmaa teksteni.

それがウイлтаのニグマーのテキストです。

niŋmaa, doronneeni ‘nimŋaa’ xeweccici, eri uilta geroini eposeni.

ニグマーは、北(方言)の人たちはニムガーと呼びますが、ウイлтаの英雄物語です。

Ikegami sensei dullee tekste bicixxeeni anducini, bara teeluŋöö, saxurree, gajakkoo, xeegembeddee oppougacci.

池上先生はすでにテキストの本を作っています、たくさんの昔話やおとぎ話、なぞなぞや唄も合わせて(池上1984a, 増訂版2002)。

caa bicixedu niŋmaa biiniddee, no cipal anaa, bai ojuukamali biini.

その本にニグマーもありますが、全部ではなく、わずかに一部だけあります。

buu Elena Bibikovandoo yee tekste bicixxeeni luca kesejini tuksergeccci, siteu anducipu, luca narisal uilta narisalddaa takkurabuddoori.

私はエレナ・ビビコワさんとの（口頭文芸）テキスト集をロシア語に訳して、新たに作りました、ロシア人もウイルトの人たちも使えるように (Ikegami 2007)。

gæda miŋga xuyu taŋgu tundadoo nada anani, Ikegami sensei Napkaduu esimeu nigmaamba *magnitofonji* nuripiccini.

1957年に池上先生はナプカさんから初めてニグマーの録音を試みました。

niŋmaa ketuddeeni ŋonimi, taldaaduni *magnitofon* bujadaxani taani.

ニグマーはあまりに長いので、途中で録音機が壊れてしまったそうです。

gæda niŋmaa siŋuunikeembe cipal *magnitofonji* nurixani gæda miŋga xuyu taŋgu nadandoo nada ananidu, cadu biiddee biccimbi.

1つのニグマー「シーグーニ物語」を全部録音したのは1977年で、そのときは私も立ち会いました。

jiin casa jiindoo *minute* biccini.

4時間40分ありました。

tarŋaci ŋonimi bimi, niŋmaa kesseeni utulimi mastaa joboccuuli.

そのように長いうえに、ニグマーのコトバを理解するのは大変むずかしいです。

Ikegami senseiddee eccini kulpæe cipal *tekstee* andumi.

池上先生でさえかきませんでしたが、全部のテキストを作ることは。

Ikegami sensei pulleuxeni *zapiska tetratiweni*.

池上先生は残しました、手書きのノート。

cawa Yosiko takkuragacci, nuriduxani, sise kesejini tukserexeni.

それを山田さんが利用して、書き直し、日本語に訳しました。

Bibikova-san luca *teksteweni* anducini.

ビビコワさんはロシア語のテキスト（ロシア字によるウイルト語表記とロシア語訳）を作りました。

eri uilekkööni derruullipu döo miŋga nuŋu ananiŋaci, yee ananidu xojixapu.

この作業を私たちは始めました、2006年ごろに、今年終わりました。

Ikegami sensei döo miŋga joon gæda ananidu goi naatai ŋenexeni.

池上先生は2011年に亡くなりました [他の地に行きました]。

buu tawasai yee bicixxee itteumi eccipu utullee, no tari agjeeni möröcciwii.

私たちは彼にこの本を見せることはできませんでしたが、彼は喜んでいてと思います。

bicixe oyoduni sugbuma *kartinaji* irgaxapu.

本の表紙には魚皮の絵で模様を付けました。

yee *kartinawa* Bibikova eekte putteni Veronica Osipova anducini.

この絵をビビコワさんの娘さんヴェロニカ・オシポワさんが作りました。

eri aja, uilta purigesel meene *kuriturabi* alimi dapaucceeci.

このことはよいことです、ウイルトの若者たちが自分の文化を受け継いでいます。

yee bicixedu *kompakte diske* biini.

この本にはCDが付いています。

diske dooduni Napka niŋmaaccini dooljipicini.

CDの中でナプカさんがニグマーを語ったのが聞けます。

eewure *materialejini*, *latine/luca döö teksteji*, *sisal/luca döö perefodeji*, yee bicixxee takkurami utullici *uconyiddee uilta narisalmaa*.

音声資料とローマ字・ロシア字 2 種類のテキスト、日本語・ロシア語の 2 種類の翻訳によって、この本を使うことができます、研究者もウイルトアの人たちも。

mini *universitetejubi bibliotekani yee bicixxee internetedu eksexeni*.

私の大学の図書館がこの本をインターネットにあげました。

esigdee bicixe anaaddaa, *interneteteji niiddee xaduddaa itemi dooljimi utullini yee niijmaa teksteweni*.

今や本がなくても、インターネット上でだれでもいつでも見たり聞いたりできます、このニグマアのテキストを。

eri aja, uilta jakka niijmaamba cipal naa narisalni saami utullici.

これは素晴らしいことです、ウイルトアの宝物であるニグマアを世界中の人が知ることができるのは。

uilta *teksteni bicixxeeniddee esigdee interneteteji taumi dooljimi utullipu*.

ウイルトア語テキスト集（日本語版 池上 2002、ロシア語版 Ikegami 2007）も今、インターネットで読んだり、聞いたりできます。

niijmaa dooduni döo kese biici: uilta kesejje kiillee kesejje.

ニグマアの中には 2 つの言語があります、ウイルトア語とエウエンキー語と。

niijmaa dooduni nari meene kesseewi kiillee kesejini yaayyeeni.

ニグマアの中で人（登場人物）は自分のことば（せりふ）をエウエンキー語で歌います。

nari meene meene *replikaji yaayallini*.

各人がそれぞれ自分の折り返し句（リフレイン）で歌い始めます。

Yosiko baaxani, eri tede kiillee keseni esi bæ, a kiillee kesseeni kalaxa goi kese biini.

山田さんは発見しました、これは本当のエウエンキー語ではなく、エウエンキー語を変えたほかの言語であると。

eri niijmaamba goci joboccuuli oini.

このことがニグマアをさらにむずかしくしています。

esigdee buu niijmaa tedeteini laksumaccipu.

今や私たちはニグマアの真実に近づきました。

Ikegami sensei möröccini, niijmaamba kiillee narisalni Saxalintai uiltatai gaduxani billee, gæda miŋga jakpu taŋgu nuŋundoo anani xamarakkeeni.

池上先生は考えています、ニグマアをエウエンキー人たちがサハリンのウイルトアにもたらしただろうと、1860 年代以後に（池上 1984b [2014: 256]）。

kiillee niŋgakambani unigelegeccæeri, buu bakkepu taani: xooni xaidu niijmaa occini, cowocci xooni Saxalintai narisal sindaxaci.

エウエンキーのニムガカンを比べてみて、私たちはわかるかもしれませんが、どのようにいつニグマアができたのか、そしてどのようにサハリンに人々がやって来たのか。

gileedu, kuujiduddee niijmaajoci *geroj eposeni biini*.

ニブフやアイヌにもニグマアのような英雄物語があります。

cawa niŋmaatai unigelemi pergexe uconyj biccindee, esilekke gæda niŋmaa
tekstewe eewurreeddee geem takkurami utullipu.

それをニグマーと比較してみた学者がいましたが（佐藤 1994, cf. 丹菊 2001, 山田 2009）、今や一つのニグマーのテキストと音声で全部利用できます。

eri mastaa aja xamarreε uconyj narisalduni.

このことは大変よいことです、今後の研究者にとって。

uconyj mali esi bæε, uilta narisalni meene kesseewi kuriturabi dapadubuddoori
niŋmaamba yee bicixeji taakpisi taani.

研究者だけでなく、ウイルタの人たちが自分の言語や文化を取り戻すためにニグマーをこの本によって思い出すことでしょう。

ereŋeci bii gellæwi.

このように私は願っています。

gee, niŋmaamba oyuukamba dooljisu.

では、ニグマーを少し聞きましょう（ニグマーの一部をテキストと音声で提示）。

agdapsæε.

ありがとうございました。

付記

本シンポジウムの概要がサハリン州郷土博物館の HP に掲載されているので、参照されたい（2015/01/12 最終閲覧）：

http://sakhalinmuseum.ru/news_401.php （ロシア語版）

http://en.sakhalinmuseum.ru/news_84.php （英語版）

また、上記でも言及したとおり、山田（編訳）2014 および池上 2002, Ikegami 2007 の全ページが付属音声資料とともに、北海道大学学術成果コレクション HUSCAP で公開されている：

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/56191> （山田 編訳 2014）

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/56940> （池上 2002）

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/56506> （Ikegami 2007）

参考文献

池上二良

1984a 『ウイルタ口頭文芸原文集』北海道教育委員会／網走市北方民俗文化保存協会。

1984b 「カラフトのウイルタ族の英雄物語とその伝来」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』52: 1-4. [山田（編訳）2004: 253-258に再録]

1997 『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会。

2002 『増訂ウイルタ口頭文芸原文集』（ELPR A2-013, 音声CD付き）. 大阪学院大学情報学部。

Ikegami, J.

2007 *Skazanija i legendy naroda ujta* (E. Bibikova tr./ T. Tsumagari ed.). Graduate School of Letters, Hokkaido University.

潤瀉久治

1981 『ウイルタ語辞典』網走市北方民俗文化保存協会。

佐藤知己

1994 「近隣諸民族との比較からみた yukar」『北海道教育大学紀要（第1部B）』45/1: 77-81.

丹菊逸治

2001 「サハリンアイヌ散文説話の一ジャンル tuytah について：「挿入歌」からみた文字資料」村崎恭子（編）『少数民族言語資料の記録と保存：樺太アイヌ語とニヴフ語』（ELPR A2-009）: 69-90. 大阪学院大学情報学部.

津曲敏郎

2010 「民族自身による言語記録の重要性」北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター（編）『知里真志保 人と学問』3-22. 北海道大学出版会.

Tsumagari, T.

1985 “Grammatical outline of Uilta”. 『アジア・アフリカ文法研究』14: 1-15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

2004 “NGO as a Link between Linguist and Community”. O. Miyaoka and F. Endo (eds.) *Languages of the North Pacific Rim* 9: 79-82. Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

2009 “Grammatical outline of Uilta (Revised)”. *Journal of the Graduate School of Letters* 4: 1-21. Graduate School of Letters, Hokkaido University.

山田祥子

2009 「ウイлтаの語り物ニグマーについての予備的考察」『昔話：研究と資料』37: 133-144. 日本昔話学会.

山田祥子（編訳）

2014 『ウイлта長編英雄物語ニグマー：シーグーニ物語テキスト』（佐藤チヨ 演唱／池上二良 採録・解説／E.ビビコワ 露訳／津曲敏郎 監修・序，音声 CD 付き）. 北海道大学大学院文学研究科.

（つまがり・としろう／北海道大学大学院文学研究科）